
白と黒の魔術師

アヴァンシア

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

白と黒の魔術師

【Zコード】

Z3937U

【作者名】

アヴァンシア

【あらすじ】

オタクだった少年が神様の氣まぐれでネギまの世界に転生。
もちろんチートで行くでしょ！…ってことでFate/EXTRA
のアリスの能力をもらつて原作に入っていく。

プロローグ

「「めんね！」

私の前で少女が手を合わせて謝つている。

「つてー！」「ドゴだよー！」

思考が追いつかない頭で全力で考える。

さつきまで私はパソコンの前にいたはずだ。

そして、段々眠くなつてきて気付いたら「おぐら」との可愛い少女に謝られていた。

「はい！？ナゼ？どうして？」

「あわわっ！落ち着いてください！」

「こんな時に落ち着いてられるかー！」

私は叫びながら、やつぱり落ち着いた方がいいかなと思いながら調子に乗つてみた。

「すいません！すいません！勝手に連れてきてしまつて！」

「別に大丈夫だ帰してくれればな」

すると少女はもじもじし始め、戸惑いながら告げた。

「あの世界には帰れません。ここは天国ですから」

それから10分後

「まあいいか。」

「えつ、いいんですか？では、さよなら」

「待てよ」

走り去る少女を抱きかかる。

「まさか、人を殺しておいてタダで済むと思ってるのか？」

「私にどうしようとー？」

少女は脅えながらこたえた。

「私を生きかえらせろー！」

「無理ですよ～！もうあの世界には帰れません。」

あの世界？俺はその言葉に疑問を抱いた。

「他の世界になら大丈夫なのか？」

「それなら可能ですけど」

私は元の世界でやりたいこともないから少女に話を持ちかけた。

「私をネギま！の世界にトリップさせろ！勿論能力もくれるよね？」

（笑）

「う～、貴方を殺してしまったのは私の責任ですし…仕方ありません。願いを三つ言って下さい」

ここが肝心だな

うん。

決ました！

「まずは、この頃ハマつてた fate/EXのアリスの容姿と能力、二つ目は無限の魔力、三つ目はアリスをサーヴァントとして欲しい！」

悩んだがこれにした。

アリスの固有結界は地味に強いしアリスは可愛すぎるから仕方ない（笑）。

「分かりました。貴方がトリップする時に付けておきます。時代や場所はどうしますか？」お！決められるのか

ならこれだな

「魔法世界の大戦時代のラカンが入る前の紅き翼の出でぐる戦場に送つてくれ」

「分かりました。今から送ります。

新しい人生を楽しんできて下さい。

とりあえず不老にしておいたので

おー氣前いいな

そして下に穴が開いたと思つたら私は落ちた。

s.i.d.e.??.?

魔法世界の戦場に近い森の中

戦いの音が響くその森の木に背中を預けるようにして「あつす」は眠っていた。

「うーん、ここは何処〜?」

「ここには魔法世界の戦場に近い森の中よ。」

隣に目を向けるとそこには黒いゴスロリの服を着た少女がたつていた。

ぶつちやけアリスでした。ありがとうございます!

「そつか、わたし死んじゃったんだ…」

「そう、そして『わたし』はまたこの『わたし』を呼んでくれたの」「そう、わたしがアリスを呼んだの、これから先、わたしといつしょに居てくれる?わたしはアリスのありすじやないけど…それでもアリスといつしょに居たいよ。」

「なに言つてるの?たしかに今の『わたし』はありすじやないけどわたしを、このわたしを呼んでくれた。ナーサリー・ライムなんて物語なんかじゃなくてアリスとしてのわたしを呼んでくてた。ほんものになれなかつたわたしを…」

そう言うとアリスは少し悲しげな表情を見せた。

だからわたしは言つたんだ、ほんものなんかじゃなくてアリスがアリスで居れるように

「わたしがアリスを呼んだのはありすじやなくてアリスなの!他の誰でもないアリスなの!前の『私』は何処かの正義の味方みたいに誰かを救いたいなんて思つてた。独りぼっちだつた私は自分の存在意義を見つけたかったのかもしれない、だから救いたいって思つた。

私といつしょで独りぼっちだつたアリスを、偽善かもしれないでもゲームの中で消えていくアリスを見てどうじょうもなく救いたくなつたんだ。」

「でも、わたしはありすにはなれないの。ニセモノだから…」

「アリスはアリスだよ、他の誰でもない『ほんもの』のアリスだよ！」

「わたしがほんもの？」

アリスはびっくりした顔でわたしの顔をみた。

「そうだよ！アリスはアリスしかいないんだかこれからもほんものなんだよ。ありすの鏡なんかじゃなくてアリスなんだよ！」

自分でも何を言つてるのか分からなかつた。ただただこの小さな女の子に悲しい表情をしてほしくて

「わたしはわたししかいない・・・。ならありすやありすにソックリなわたしはなんなの？」

私はこの子を幸せにするんだけど

「きまつてるでしょう！家族だよ！…」

泣きながらアリスはわたしに抱きついて

「ありがとう。」

そうつぶやいた。

わたしはアリスを抱きしめながら誓いを声に出した。

「大丈夫。わたしはアリスの家族だから、ずっとといつしょだから、わたしといつしょに幸せになろ？」

そのあとアリスは泣きになつた。これまでの不幸の分と今の幸せの涙を。

後になつて気がついたのだがこれって告白みたいだよね〜、と他人事みたいに思つた

そのあとアリスは冷静になつたのかわたしからさつと顔を真つ赤にしながらアリスがはなれた。

そしてわたしは言つたんだ。

「そうよ。あたしはあたしだけいればいいの。だつてあたしはあたしだけのあたしだもの。」

ありすの言葉を借りてわたしの思いを

そしたらやつぱり顔を真つ赤にしてアリスが言つた。

「もちろんじゃない！わたしはわたしだけのわたしなんだから…！」

こんどびきりの笑顔で

「やつにえばわつも魔法世界つて言つてたけどアリスつてここのネギま）の知識つてあるの？」

「そのことなんだけど世界のバックアップを受けているみたいなの、だからこの世界の常識とかはあるんだけど原作の知識はないわ」

「そう、ネギまの知識自体はないのね。でもなんで世界からバックアップを受けてるのかな？わたしが無限の魔力を頼んだからかな？」

「多分そうね、魔力もありますといった時みたいな感じだから」

「よかつた。でもわたしはどうなんだろう？わたしは魔力？みたいなものをアリスから感じるよ？」

「わたしはわたしなんだから繋がつてるのは当たり前でしょ。これじゃあサーヴァントとマスターの関係が逆だけどね」

「そうだね、でも関係ないよ。わたしとわたしは一心同体なんだから」

「やうね、もうわたしとわたしは一心同体なんだから、絶対に離れないんだから」

「そう言つてわたし達は笑いあつた。

「そうだ、これからどうするの？あてでもあるの？」

「うん。帝国のお姫様に頼る？と思つたの」

「わたしはそれでいいわ、アナタがマスターなんだから。でも具体的にはどうするの？」

確かにそこが問題だけどちゃんとが考えてある。

「少し聞くんだけどアリスって魔力を普通の人みたい遮断できる？」

「できるけど…そういうこと？帝国のお姫様つてそこまで甘いの？」

「でもそれでいいのなら簡単でいいわね」

「でしょ！でもまずはこの現状をどうにかしないと」

「そうね。うるさい音を消さないとね」

「ここからでも聞こえる争いの音。」

銃や魔法、そして大砲の音。

「なら一人でやろう？力を合わせて」

「わたしとわたしは一心同体なんだから」

「そこでふと気づいた、自分の呼び方をきめてなかつたのだ。」

「アリス、今更だけど私のことは『ありす』って呼んで。私達は一心同体なんだから名前もいっしょだよ。」

「分かつたわ、あります、でいいのよね？」

「そうだよ！ありがと、アリス。じゃあ気を取り戻して広げよう？」

「私達の世界を」

「そうね、合わせましょ、私達の心を」

「「！」では、鳥はただの鳥。」「」

「「！」では、人はただの人。」「」

「「固有結界『名無しの森』！…」」

side 一般兵

それは突然のことだつた近くの森から在りえない程の魔力を感じた
と思つとそれは一瞬で世界を変えてしまつた。

それは比喩ではなく文字どうり世界を変えてしまった。

魔法学校にも通つたことのある俺だがこんな魔法は聞いたことがなかつた。

世界が上書きされるような、まるで違う世界にでも来たかのようなそしてこの世界に入った瞬間から肌の焼けるような痛みを感じた。ソレと同時に俺の中の魔力が減つていくのを感じた。

逃げなければならぬ、そう体中から警告が出ている。

なら何処に逃げる？無論家に、

あれ？家は何処だつた？思い出せない…

何故逃げなければならない？分からぬ…

そもそもお・れは・・・だれ・・・だ・・・?

そこで完全に体がなくなるのかんじた

s i d e あります

固有結界『名無しの森』が発動した瞬間、世界が塗り替えられるしていくことを目の当たりにした。

見渡す限りの青い空を瞬く間に真っ白に変えていく。

ここではみんな平等。アナタとかオマエとか、ヤマダさんとかスズキさんとか、いちいち付けた名前なんて、みんな思い出せなくなつる。それだけじゃない。だんだん、自分が誰だか分からなくなつていつて最後には人という存在もなくなつてしまつ。自我を薄めることで存在を消す固有結界。

『名無しの森』

これだけの奇跡を本来は世界が許さない。そこで世界からの抑止力が働くのだ、魔術師はその抑止力に対抗するために膨大な魔力を消費し続けているため普通の人間であれば数分とこの術は持たない。普通ならば。

これを扱っているのはアリスで、そしてアリス自身は世界からのバ

ックアップを受けている身。バックアップを受けているということは世界そのものと同意であるに等しい。

世界そのものが世界を変えるのだからそこに矛盾は生じず抑止力は働かない。

よつて膨大な魔力を消費することなく固有結界という大魔術を維持できるということだ。

だが固有結界は術者の心情風景を具現化する魔術なのだ。だから私たちは一人では発動させることができない。一心同体なのだから心も一人で一つ。ありますだけでもアリスだけでも実現しない。半分だけの心で心情風景を写し出せるわけがない。そこが私たちのデメリットであり、誓いの証もある。

私が固有結界という魔術に見ほれている間に周りの音が止んでいた。

「あります！ここに大きな魔力を持つた魔術師が三人ものすごいスピードでやってきてるわ。どうしましょうか？」

この時代・場所で魔力の大きい人物には心当たりがあつた。それ以外だつたのならいやだが

「たぶんそれは紅い翼のメンバーだよ。」

「どうするの？まっすぐこっちに向かつて来ているようだけれど」さて困ったことになつた。

ここで紅き翼を殺してしまつと原作が早々に壊れてしまう。それは避けなければいけない、何故ならここでナギ達に死なれてはネギすらいないネギまが始まつてしまつ。本来はテンプレ転生の場合にもつとも大きいメリットは原作を知つていてるという未来視にも似た知識だ。だがここで原作を壊してしまつとのメリットが役に立たなくなることをさしている。

そして私達は帝国側に付こうと考へてゐるのだからここでナギ達に見つかってしまえば今後の行動が難しくなつてしまつ。ならどうす

るかと問われれば私達に代わるものを見つめ立て上げてしまえばいいのだ。

「アリス、ここは私達の”あの子”に囮になつてもらいましょう?」

「そう正体不明で消息不明、架空の巨人

「そうね、ジャバウォックならあのくらいなら渡り合えるはずだし私達をうまく隠してくれるわ」

アリスもこの意見に賛成のようだ。

さあ

「あの子」を呼ぶとしましょう?
うん、それがいいよ。

そう言って、

私達はその手を振り上げる。
すると

何もなかつたそこに巨人が現れた。

背中に羽があり、全身は赤く、その皮膚にはルーンの様な紫のライ

ンが入っている。

大地が、空が鳴動する。

規格外の力の出現に、

自分でなく、空間すら震えていた。

この子が、わたしのお友達。

「じゃあ私達はヘラス帝国に行きましょうか
「後はよろしくね、ジャバウォック?」

まだ物語は始まつたばかりだ。

sideナギ

よう。俺はナギ・スプリングフィールド最強無敵の魔法使いだ。数年前から旧世界から魔法世界に拠点を移して活動している。旧世界から移住してきた新しい民によつて形成された北の連合『メセンブリーナ連合』と、先住の獣人ら古き民によつて形成された南の帝国『ヘラス帝国』は、長い間共存して上手く折り合いをつけていた。

だが、連合と帝国の関係がキナ臭くなつたかと思うと、突然戦争をおつ始め出した。

些細な誤解から始まつた争いが魔法世界を南北に一分する大戦に発展し、世界中の魔法使いが戦争に駆り出された。

俺達『紅き翼』も連合側につき、戦争に参加している。ついさつき帝国側と衝突してゐるつて通信が入つて救援に向かつてる途中なんだが、どうもいきなり通信が途絶えたらしい。

アルと詠春も急いだ方がいいつて言つてることだし、大至急そこに駆けつけた。

だが、戦闘は既に終わっていた。

「おいおい、どうなつてやがる……」

どつちが勝つたとか負けたとか、そういうんじゃねえ。全滅。連合も帝国も関係なく、そこには戦いの傷跡を残して誰もいなくなつていた。

「なに、が……起こつた……？」

呆然としながら詠春が呟く。そりやそうだ。どつちかが全滅して消えるならまだ分かる。だが、両方つてのはどつこつことだよ。

「……転移、でしようか」

アルが神妙な顔で推察する。

転移。確かにそれが一番しつくづくる。だが、転移なら中には避けるまたはレジスト出来る奴もいるだろ？

だいたい、転移でここまでできる魔法使いなんてひとつで名が知られているハズだ。だが連合にも帝国にもそんな奴はいねえ。（あるいは、まったく別の勢力か……？）

「おい、ナギ！ あそこに何かいるぞ！」

思考を中断して、詠春が指差した先を見ると、そこには赤い色の悪魔のような怪物がいた。

全身の感覚が警報を鳴らす。

逃げろ……！

アレは、触れてはいけない害敵だ……！

冗談じゃない。

あんなものを相手にして、無事で済むはずがない。

ここは、一時撤退するのが正解だ。

「ナギ、逃げますよ……アレの怪物相手に無事では済まないでしょう。」

「ここは一時撤退した方がいい」

アルの驚愕に染まった声で意識が急速に戻つてくる。

「あ、ああ。アレ相手は確かにキツイ、一時撤退する。」

皆に確認を取り、詠春が頷いたのを見た。

そうと決まれば話は早い。

三人で全力でこの場から逃げ出す事にした。

と、背後から、

ケモノの咆哮の様な声が聞こえた。

「…………！」

俺達はそれを聞きながらスピードを上げてその場から逃げ出した。戦場から十分離れた位置で休憩した。全力で逃げてきたので、息が上がっている。加えて、先ほどの不可解な出来事で、未だに頭が混乱している。

戦場に誰もいない……とは一体どうなつていい？ そして、凶悪な

気配の怪物。あれこそが事件の犯人なのだろうか

「あれほどの凶悪な殺氣……これは少々厄介かもしません。」

一息ついたアルがため息をもらした。

もしあの怪物が犯人だとすれば対策もなしに近づくのは危険だろう。

「あの怪物は強い、たぶん俺達『紅い翼』でも本氣でいかないと無事じやすまないくらいに」

「そうだな、ナギ帰つたらゼクスに聞いてくれ。あの怪物がなんのかを……」

アルの言つことは間違いない。俺は奴を見た瞬間背筋が凍つたかと思う程の殺氣を感じた。

今の俺達ではアレには敵わない。

「詠春分かった、あとでお師匠に聞いておく。」

早くあの怪物の対策を立てないと

でも、まずは安全なアジトに帰るとするか。

s i d e ありす

私達は今、ヘラス帝国に来ている。

私達がどうやってここまで来たのかって？

それはあれだ、アリスの転移魔術を使ったのだ。

これは魔術の中では大魔術の部類にあたるのだが私のサー・ヴァントのアリスはこれを高速詠唱によつて5秒もかからずやってのけてしまった。

それを私は「アリスはすごいなー」と見ていただけであったが。

それはともかく私達はヘラス帝国に來た。

目的はテオドラ第三皇女にあつて保護してもらうためだ。

テオドラなら難民のふりをすればかくまつてもらえるだろ?と思つたからだ。

あの子はまだ子供で人が困つていると無条件で助けてくれるだろ?

テオドラを探していた私達はヘラス帝国の中央で探索魔術を使い位置を確認した。

これが普通の魔術師や魔法使いなら魔術を使つたのがばれてお繩を頂戴することになるのだろうが魔術を使つたのはアリスであり、アリスは聖杯戦争でキヤスターに選ばれたほどの魔術師だ。

魔力の隠蔽を完璧に行つていたのでまず見つからないだろ?

どうやら探索が終わつたようでアリスが話かけてきた。

「テオドラは何故か町外れの森に一人でいるようね。

あそこは確かドラゴンとかの魔獣が出るはずなのだけど・・・」

「なら、好都合だよ。テオドラ一人なら勘ぐられることもないだろ

「うし

「なら早くいくわよ。」

そつ言つてすぐ私の手を掴んで転移した。

s.i.d.e テオドラ

「メイドの田を盗んで城を出てきたはいいのじゃがどうしたものか」「しつこく勉強をしり、と言つてくるメイドに嫌気がさして飛び出してきたのはいいんじゃがここは何処なんじゃ？」

見渡す限りの森でどうすればいいか、テオドラは途方にくれていた。（町外れの森にはドラゴンが出ると言つしの）

静かな森に時たま聞こえてくる動物の声が恐怖を募らせる。とりあえず来た道を戻ることにしたテオドラは道無き道をひたすらに歩いていた。

少し歩いて疲れが出てきたのか足が重くなってきた頃に木が大きく動く音が聞こえてきた。

心なしか少しづつ自分の方に音が近づいてきていた。

（「だ、ドラゴンなのじゃ……？」）

（いや、いやなのじゃー食われとうないー）

「だ、誰か助けてくれ……！」

つい大声を出してしまったテオドラの前に自分の背の長けの5倍ほどもある黒い色をしたドラゴンが姿を現した。

ドラゴンの方はエサを見つけたとばかりに襲い掛かるのとテオドラに突っ込んだ。

テオドラはあまりにも大きなその体とその凶悪なシリエットにおびえて動けなくなっていた。

つこに食べられると田を騒ぎ体を小さくした。

しかし、次にやつてきたのは林檎があたつた程度の反動だった。

恐る恐る目を開けてみるとそこには空から降りてくる白いドレスと黒いドレスに身を包む一人の少女と自分の足元に転がる小さなドラゴンだった。

s i d e ありす

『だ、誰か助けてくれ!!』

私達が転移で町外れの森の上空に現れた時、テオドラの叫び声が聞こえた。

下を見ればテオドラは黒いドラゴンに襲われそうになつており、怖さで腰が抜けたのかその場に座り込んでいた。

漫画を読んだだけとはいゝ、知つている人が死ぬところを私は見たくなかつたのだろう。

「アリス、助けてあげて！」

気がついた時には自分のサーヴァントであるアリスに助けを求めていた。

「分かつてゐるわ。大丈夫、これくらいならすぐに終わるから」

アリスは可愛い笑顔を私に向けたあと下にいるドラゴンに顔を向けなおして手をつけない方の左手の人差し指をドラゴンに向けた。

一瞬、ドラゴンの体がモノクロに見えたかと思うと、瞬く間に体が小さくなつていった。

最終的に手の平サイズになつて効果が止まつた。

「これくらいでいいのよね？」

「うん。でもこれって元に戻るの？」

この伸びドラゴンの未来が気になつたので聞いてみた。

「そうね、たぶん一日くらいで元に戻ると思つわ。」
「一日がんばってくれよ、ドラゴン君。」

とうあえずテオドラに会つたために私達は飛行の魔術でゅうくりと地上に降りていった。

まだ腰を地につけたまま呆けた顔でテオドラは私達を見上げていた。
どうやら余程ドラゴンが怖かつたようだ。

「立てますか？」

手を差し伸べて立てるかどうか聞いてみる。

「大丈夫なのじゃ」

あたふたしながらも質問に応えこちらの手を取つて立ち上がる。
アリスは面白そうにその様子を見ていた。

テオドラはふう、と小さく息を吐く。

それで緊張が解けたのかこちらに質問してきた。

「お主たちが妾を助けてくれたのか？」

「そうよ。でも感謝するならありますにいいなさい、貴女を助けてつ
て言つたのはありますなんだから」

「そうか、ありがとうなのじゃ。それと助けてくれたお主も助かつ
たのじゃ。すまぬがお主達の名前を教えてもらえんか？」

「私の名前はアリスよ。」

「で、私の名前があります。」

「ほえ！？」一人とも同じ名前なのか！顔も瓜一いつなのも関係あるの
か？」

確かに私達を知らない人が見れば同一人物と思うだろう。

そのどうりなのだけれどここは双子とかで通しておくのが妥当だな。

煩いやツが出てきやうだしな。

「顔が同じなのは私達が双子だからで、名前が同じなのは親が双子だと知らずに名前を一つしか考えてなかつたからだよ。」

私がこいつやって説明していると隣でアリスが不満そうな顔をしていたので念話で言い訳の説明をする。

アリスの顔が口口口口変わっているといつが可愛いな、と思ひながらテオドラに質問を返す。

名前や立場は知つてゐるが私達のことを怪しく思われないようになりますべきだと思うからな。

「妾の名前か？妾の名前はテオドラ・バシレイア・ベラス・デ・ヴェスペリスジニア。」こく拉斯帝国の第三皇女じや。」

「ううだ、と言わんばかりに胸を張つて言つテオドラ。

「テオドラ様つて呼んだ方がいいのかな？」

私は内心微笑みながら質問した。

「テオでよい。妾もお主らのことをアリス（あいす）と呼ぶのじや。」

「

「それでアリスが妾を助けてくれたのじやねつ、じつやつたのじや？」

テオドラはさつきのじびドラゴンを手に乗せて遊びながら聞いてきた。

「私の魔術を使つたのよ。私達は魔術師なの。」

私は魔術を使つたことないんだよなーと思い苦笑しながらアリスの説明を聞いていく。

「その年でドラゴンを倒せるほどの魔法が使えるのかーす」このじやな、お主達は。」

本当に驚いたよつて目を輝かせてアリスの話を聞いてくる。

少しして何か閃いたのか勢いよく話かけてきた。

「そうじゃーアリス、妾の遊び相手と護衛をやつてくれんか？城に一人でいつもいるのは飽きたのじや。妾を助けてくれたお主達なら護衛もできるじゃねえ。」

その言葉を待つていましたとばかりに私達は返事をした。

「いいわよ。私も行く所が無くて困っていたところだしね。」

「私もいこよ。テオとは仲良くなれそうだよ。」

「そうか、よかつたのじや。あとは父上にお願いするだけじゃな。」

「よろしくね。テオ」

「ひらりこそなのじや、あります。」

私達はあの後、テオといっしょに城に戻り門番に私達をテオが友達じゃ、と説明するとなるほどといった様子で城の中に入れてくれた。その後、テオを探していたメイドに叱られたり（何故か私達も叱られた）、テオの父上にテオがお願いして私達がテオの遊び役となつた。

報告を見ていたが護衛のほうはどうでもいいと思つてゐるみたいだつた。

それはそうだろう、娘と同じくらいの子供に普通は護衛など任せないからな。

それでやつと立てたと言つたところか・・

原作と書つた舞台に

これが「ひらりこそな」かな？

s i d e ありす

あれから数日が経ち私達が城に馴染んできた頃。

テオの護衛と言う名の遊び相手になつた私達は戦場に出ることにした。

別に誰かに頼まれた訳ではない。

私の魔術の練習のためである。

あれから私はテオとほとんどいつも行動していたために魔術を使う暇がなかつたのだ。

今回はテオが勉強をするからと私達は一日の休みをもらつたのである。

「ありす、貴方にはまず初めに自分を守るための防御魔術と逃げるための転移魔術、もしものための回復魔術の三つを使えるようになつてもらうわ」

「わかつたよ、痛いのは嫌だもんね。でも戦場つて危ないんじゃないのかな？」

「そうね、でもありますなら大丈夫よ。私が全力で守るから」

「うん、よろしくね アリス。私もすぐにアリスを守つてあげられるようになるから」

アリスは自分の台詞が恥ずかしかつたのか、私の言葉が嬉しかつたのかわからぬけど顔を真っ赤にして視線を横にそらした。

「ほら、早くいくわよ！」

膨れつ面で私に急かすように手を差し伸べてくるアリス。

それを私は自分の顔がにやけているのを感じながらアリスの手を取つた。

そして、城の中の一室から一人の少女の姿が虚空に消えた。

side ナギ

あの怪物に誰もいなくなつた戦場で出会つてから数日が過ぎた。

この数日も俺達は戦場に叩き出されていた。

しかし、あの怪物はあれからの戦場に出でてはこなかつた。

赤いあの怪物の正体は結局分からずじまい。

あの後でお師匠のゼクトに聞いてみたがそれでも分からなかつたのだ。

誰もいなくなつたあの戦場にいたはずの人々は誰一人として見つかっていない。

搜索の手がかりは赤い怪物だけ

あれはあの怪物が起こしたのか、それとも別の誰かなのか。

分かつてていることは一つだけあの怪物が強いということだ。

「ナギ、また戦争のようです。急いで仕度をしてください。」

「ああ、わかった」

アルに返事をしながら仕度をする。

仕度といつてもいつものローブ、アンチョコ、杖だけだけどな。

俺達が戦場についた時にはもう戦争が終盤に差し掛かっていた。
「ナギ、こちらが押されているようです。早く加勢しなければ
「そんなことぐらいわかってるよ！おら、いくぜ！」

えーと・・・『百重千重と重なりて走れよ稻妻千の雷……』

無数の稻妻がヘラス帝国の兵を襲う。

「おお・・

「一撃で戦場を覆すとは・・・」

「これで取り合えずは大丈夫だろ?」

「いいえ、これだけでは駄目です。今回は敵に強力な魔法使いが入ったようで守りが堅い上に回復が以上に早いのです。」

「お! そいつは強いのか?」

「はい、恐らく敵は戦いの最前線で防御の魔法を張っているはずです。」

「わかった。そいつは俺が倒してきてやるぜ」

「ほ、本当ですか! ?」

「そいつは強いんだろ。なら行くしかないだろ」

「やれやれ、ナギには困ったものですね」

アルがなんか言つてるが無視だ。

俺は素早く杖に乗ると全速力で前線に向かつた。

『来たれ虚空の雷薙ぎ払え雷の斧! !』

前線に辿りついた俺は素早く詠唱を唱えると前線のど真ん中に打ち込んだ。

雷の本流が敵に当たつて土煙があがる。

土煙が消えたところにあつたのは田を疑うよつな光景だった。

そこには自分よりも小さく10才くらいの白いドレスを着た少女がいた。

そして、その少女が出したであろう防御の魔法が雷の斧を正面から受け止めてなお無傷で存在していた。

俺はさつきの呪文で力は抜いてないはずだ。
むしろいつもより多くの魔力を注いでいた。

いくら最大呪文で無いとしてもこれで無傷でいたものを俺はアルや
詠春といった紅き翼のメンバー以外で知らなかつた。
俺は自分の体温が上がるのを感じた。

「おい！俺の呪文を防いだお前は誰だ！」

聞かずにはいられなかつた。

自分と同じ様な年で同レベルの呪文を扱う少女のことを。

s i d e あります

アリスに防御の魔術を使うには体を膜で覆うイメージだと聞いてから戦場に投げ出された。

ラインの繋がりからアリスが近くで気配を消して見守っているのを感じるから安心はできるのだけど

勘のようなもので自分に魔法が近づいてきていることを感じた私は
とつさに教えてもらつたばかりの魔術を使使した。
飛んできたそれはあっけなく私の魔術の壁に弾かれた。

「助けてもらつてありがとうございます。増援の方でどうか？」
「どうやら後ろにいたヘラスの兵が守つたと勘違いしているようだ。
都合もいいのでここは乗つておく。

「そうだよ。私が防御を張るから貴方達は安心して攻撃に専念する
といいよ。」

私が入つてから戦場の動きが変わった。

防御に守られたおかげで余計な魔力を使わず周りを気にせず戦えるようになつたおかげか押されていたヘラスの兵がどんどん進軍した。ちょうど勢いがのつたところで遠くに大きな閃光が落ちたのが見えた。

少ししてから光が落ちた方角から物凄いスピードで一人の人物が迫ってきた。

私は先ほどより魔力を消費して防御の魔術を使用した。

遅れること少ししてから私に向けて雷の斧が墜ちてきた。
私はなんとか衝撃に耐えて相手がいる方向を睨む。

「おい！俺の呪文を防いだお前は誰だ！」
すると拍子はずれな質問が聞こえた。

「それが人に名前を聞く時の態度？まあいいけど、私の名前はあります。貴方の名前は？」

私はそれを呆れたように返した。
十中八九、ナギだと思うけど。だって赤い髪の青年ってか少年だし、さつきのは雷の魔法だつたし。

「俺の名前か？俺はナギ・スプリングフィールド……またの名をサウザンドマスター……」

「ナギ、ね。それでどうするの？ここが何処かを考えれば想像もつくけどね」

「決まってるだろ！！俺の呪文を無傷で受けられるならお前は強いつことだ。だから俺と戦つてもうう……」

「無理だね。私は攻撃用の魔法なんて使つたことないもの」
そう、私はまだ防御の魔術しか使えないのだ。

戦いになるはずがない。

「なんだそれ？魔法の射手も打てないのか？」

「ああ、そうだけど？何かもなく・・・」

「あります、そこまでよ。今回はこれに関わるべきじゃないわ。」

いつの間にか私の横にアリスがいた。

ナギなんかは口を開けて驚いている。

「さあ、帰るわよ。練習は次の時でいいの。」

私は頷いてアリスの手を取ろうとした時、固まっていたナギが動いた。

「俺を無視して帰るんじゃねえ！！

『百重千重と重なりて走れよ稻妻千の雷！…』

戦おうとしていたところを邪魔されたからか怒ったナギが呪文を唱えてアリスに突っ込む。

アリスは片手をナギの放った呪文にむけた。

「邪魔よ」

ナギの最大呪文であるう千の雷をアリスは片手で防いでいたのだ。

そこにアリスは呪文を繋げる。

『冬の野の白き時』

アリスの片手から大きな氷の塊が打ち立たれる。

ナギは自分の最大呪文を片手で防がれるとは思っていなかつたようでそこに隙ができていた。

アリスの放った氷はナギに正面からぶつかってナギは吹き飛んだ。

「さあ、帰りましょう。」

先ほどと変わらぬ笑顔で先ほどと同じ台詞。

「わ、わかった。でもあれって大丈夫なの？」

私はナギが吹き飛ばされた方を引きつった顔で指差す。

「大丈夫なはずよ、手加減しておいたから。後からお仲間に回収されるでしょう。」

私はナギの身を心配しながらアリスの手を取った。

side テオ

テオが勉強を終えたことちゅうどありす達が帰ってきた。
ありすは少し疲れた様子で。

アリスは満足顔で。

テオは何かあつたのか気になつたがありすの様子から聞くのをやめた。

何故かやめた方がいいよと言つてゐる気がした。

何かを思い出したのか二人に話しかけた。

「明日からは大変じやぞ?」

そんなテオの言葉に一人は何故と言つた顔になつた。

「私も戦場に行くことになつたからじゃ

さも当然のように言つた。

「突然なんでの!?」

「今日の戦場にありますも出でおつたじやろ?」

もう伝わっていたのかとあります達は諦めた様子で話の続きをそくす。

「友が戦場に出ているのに妻が出ないわけにもいかぬのじや。父上

も好きにしりと言つておつたのじや」

テオの親もこの娘を止めることはできないと知つてゐるので止めようとはしなかつたのだろう。

「わかつたわよ。でも戦場では私達はテオを守るからね。」

「私達はテオの護衛なんだから

テオのそんな様子に嬉しそうにあります達は返事を返した。

テオも私達の友達なのだから

三階（後書き）

感想を頂けると作者のやる気につながります。

四話（前書き）

この小説ってキーワードには何を入れたらいいのでしょうか？
感想をお待ちしております。

「あそこが妾が気に入っているカフェなのじゃ。一番のお気に入りのメニューはパフェじゃ。あの甘くて冷たいのが最高なのじゃ。」食べている所を想像しているのか、ヨダレを垂らしそうな顔でお気に入りの店を紹介するテオ。

「テオがそこまで言つならそこにしましょうか。ありますもいいでしょ？」

テオの説明を聞いて食べてみたくなったのか、入りましょうと私を誘うアリス。

「一人が言つなら仕方ないね。私も歩き疲れたし少し休憩したかつたんだよ」

そんな一人の意見を無下にはできず、本音をもらしながら後ろをついていく私。

私達は今、テオに付いて城下町を散策していた。

理由は簡単でテオが私達に城下町を案内してやるといつてきたのだ。勉強に飽きたテオがメイドの皿を盗んで部屋を抜け出して私達の部屋にやつてきた。

それを外の様子から大体の予想がついていた私達はこれからどうするのかとテオに聞いた。

「これから城下町を案内してやろう。だからどうにかして妾を城の外まで連れて行ってくれ！」

予想道理の答えにアリスは一度ため息をついた。

「はあ、分かったわ。手につかまりなさい。」

アリスは私に目配せしてからテオに手を差し出した。

私はそれでアリスのやろうとしていることに気づいた。

いきなりの事に疑問にもつたテオだがアリスの手をとった。

それに遅れるように私もアリスの手を取る。

そして私はこれで何回目だろうと考え、

いつものように私達はその場から消えた。

次の瞬間、目に映るのは結構な賑わいを見せる城下町の大通りが見える裏路地だった。

いつものことだがアリスはすごい。

早く私にも教えてもらいたいものだ。

私でも驚いているのに始めてのテオの驚きようはすごいだろう。

魔法でも転移魔法はレベルの高い魔法使いでしか使えない上に三人でこの長距離を転移したのだ。

普通の魔法使いなら魔力が無くなってしまうだろう。

案の定テオは余りの事に言葉が出ないほどに驚いていた。

それは仕方ないだろう。

これほどの魔法が使えるものとなれば余程の名の知れた魔法使いと思ひのが妥当だ。

「どうやったのじゃ！？アリスは転移魔法が使えるのか！？」

やはり方法を聞いてきた。

それをアリスは無難に転移魔法だと説明した。

実際は魔術なのだが

テオはそれを聞いてやはりアリスはすごいだの、妾の見間違えではなかつただのと呴いていた。

そこからは当初の予定道理に妙にテンションの高いテオが城下町の店や、通りの名前などを私達に説明しながら城下町を一周ほどして冒頭の話に戻る。

店の中に入ると「コーヒーの良い香りが漂ってきた。
本格的に作っているようだ。

店員が何名かと聞いてきたので三人と応えて四人掛けのテーブル席

に案内してもらいメニューをもらう。

客席はまばらで空いている印象を受ける。

今の時間は余り混んでいないようで助かつた。

「妾はやはりパフェを注文するのじゃ。」

「私もパフェにするわ、ありすはどうするの？」

二人とも始めから決めていたようで私だけが残される。

「私はどうしようかな・・・」

「決まらないのなら私のを一人で食べない？私はもともと多くは食べられないほうだから」

私が一人悩んでいるとアリスが提案をしてきた。

私にとつてはとつてもいい提案だつたのだが本当にいいのだろうか？

「遠慮しなくてもいいのよ。私もありすと食べたいし・・・」

当たり前だと言わんばかりに返事が返ってきたのだが最後の方の言葉が聞き取れなかつた。

アリスは頬を赤くしてうつむいてしまつたからだ。

もともとアリスの提案を私が断るわけがないのだけれど

注文から少しして結構なボリュームのパフェが一つテーブルにならんだ。

これは私ではとてもではないが一人では食べきれなかつただろう。やはり二人で一つを注文して正解だつたようだ。

「これはがんばって食べないとね」

「そうね。私もこんなに大きいとは思つてなかつたわ。」

「どうやらアリスも予想していなかつたようだ。

始めに私達にこれをお勧めした張本人は余裕の顔でパフェに挑んでいた。

「テオはこんなに食べられるの? とてもではないけど私は食べきれないんだけど」

「大丈夫に決まっておるのじゃ、妾はいつも一人で食べにくるのじやぞ。」

さも余裕そうな顔でパフェを食べてる。ホントに一人でこれを食べきるようだ。

「私達も食べよつか?」

アリスに聞いてみるとアリスは顔を真っ赤にして私の方を見て言った。

「お願いがあるんだけど、ありすが私にあーんつて食べさせてくれない?」

私は一瞬何かの「冗談かと思つたがアリスがチラチラと見てる視線の先にはお互にスプーンを持って食べさせあつているカッブルがいた。

あれを見て何を思ったのかこんなことを頼んできたのだろう。もちろん答えはイエスだ。

私がアリスのお願いを断るわけがない。

私がアリスにいいよ、と応えるとアリスは見るからに顔を綻ばせスプーンを私によこしてきた。

そのスプーンを受け取りパフェから少しクリームを取つた。アリスは口を開けて私が食べさせてくれるのを今か今かと待つていた。

それを小鳥みたいだな」と思いながら「あーん」とアリスの口に持つていった。

アリスはそれをパクつと真つ赤な顔で食べながら美味しいと呟いた。

私は自分も食べようかなと思つて「アリスが私の持つているスプーンを取つた。

アリスはそのスプーンで私と同じようにクリームを取ると私に「あーん」と向けてきた。

私は多少驚きながらもそれを口に含んだ。

私もお返しとばかりにアリスからスプーンを取るとパフェからすべつてアリスに「あーん」と言いながら差し出す。

アリスは反射的にそれをパクつと口に含んだ。

それから驚いたように顔を伏せ

小さな声で「ありすと間接キス……」と呟いてその可愛い顔を真っ赤にした。

私が「アリス、顔真っ赤だよ?」と意地悪に言つとボソンと音がなるかと思つほどに耳まで真っ赤にする。

そんなアリスを眺めているとテオが話かけずらそうに話かけてきた。

「お主達はホントに仲がいいのじゃな。」

苦笑いをしているテオを他所に私はそつだよと答える。

「それはいいのじゃがな、早くしないと妾だけ先に食べ終えてしまうぞ?」

言われてテオのパフェを見てみるとすでに三分の一が無くなつていた。

私は急いで新しいスプーンを取るとパフェに手を伸ばした。
気が付いたようにアリスが顔を上げ私に続いてスプーンをパフェに伸ばす。

二人で交互にパフェをつついていく

テオがパフェを食べ終える頃にはなんとかパフェを完食することができた私達であった。

食べ終えたテオの頬には白いクリームが付いていた。
私はテオに動かないように伝え、手でそれをくつって自分の口に放り込む。

「ありす、ありがとうのじゅ」

頬を薄つすらと赤く染めたテオがお礼を言つてくる。

それを見ていたアリスが膨れつ面でいた。

案の定いうかアリスの鼻の先にもクリームが付いていた。

私はアリスにも動かないよう言って、

両手でアリスの顔を動かないように固定して顔を近づける。

目を瞑るアリスの鼻のクリームを舌で舐め取った。

目を開けたアリスはあっけに取られたような顔で呆然としていた。

私がどうしたの?と声をかけるとアリスは顔を真つ赤にして気絶してしまった。

テオがやれやれといった様子でアリスに駆け寄つてアリスを揺すつて起こした。

アリスはなんで気絶したのだろうか?

前の戦場に出た時に貰つていた報酬でお金払い店を出る。呆れた様子のテオと、まだ顔が赤いアリス。外はすでに空がオレンジに染まつていて私達は手を繋いで急いで城に戻るのであつた。

明日はテオの初めての戦場。

私達が守らなければ、といふ言葉を胸に宿して。

その頃、紅い翼ではナギが病院のベットで体を治していた。この前のアリスとの戦いで派手にやられたナギはそのままアルと詠春に病院に運ばれたのだ。

アルがナギにどんな相手だったのかと聞くとナギは気まずそうに自分よりも小さな可愛い女の子だったと応えた。

アルはナギがそんな女の子に負けたことを驚きながらも興味を持つていた。

ナギを負かす実力にも興味を持ったがアルが気になったのは彼女の容姿だった。

アルがどんな服が似合う子なのでしょうかとか気持ちの悪いことを言っている隣でゼクトはその魔法に興味を持つっていた。

隠しているのか殆ど感じ取れない魔力、そしてナギの最大呪文を片手で防ぐ防御

一言で大きな氷を打ち出す魔法。

どれをとっても興味が尽きない。

合ってみて見たいとゼクトは思いをはせる。

ナギはナギで次はぜつて一負けねえ！と叫ぶ。

詠春はそんな皆の様子を見ながらナギに「それなら早く怪我を治せ。」と言った。

そんな言葉にガクッと肩を落として落ち込むナギ。

しかしナギ達がありす達と会うのはもう少し先の話
とても意外な形で出会うことになるであつた。

side アリス

私が恥ずかしさの余りに氣絶してしまった日から一日が経つた。
私達はテオの横に付くように護衛をしていく。

これから戦場に行く。

ありすがテオを守り、私が外敵をなぎ払う。
それだけのことなのだ。

「テオ、本当にに行くの？地獄が待つているかもしないわよ」
テオの心を動かすことはできないだろうが最後の確認をとつておく。
これから見る光景にテオが潰れないように覚悟を決めさせるのだ。

「いいのじゃ、アリス。これも妾が決めたことのじゃ」
いつものように胸を張つて答えるテオ。
だがよく見てみるとその体が震えているのが分かつてしまう。
これが精一杯の強がりなのだろう。

私はそれを見なかつたことにして前を向いた。

私達の乗つている飛行船から一kmほど先では既に戦闘が始まつていた。

飛び交う魔法の嵐。

それらの魔法が両軍の兵に当たり、一人また一人と命の灯火が消えていく。

私に人の魂が見れるのならばここはさぞかし賑やかなはずだ。

ありすがテオの手を握っているのが見える。

なんだか嫉妬しそうになつたけどそれを抑えて私も反対の手を握る。
やっぱりテオの手は震えていて
でも私は少しでも安心できるように強く手を握る。
ありすも同じようにしているようだ。
ちよつと嬉しい。

戦場が近くなるにつれて流れ弾が多くなってきた。

そんな時、私達の飛行船に向けて光の魔法が迫ってきた。
それを見たありすは胸に手を当てて祈るようなポーズをして自己を
変革するための呪文を呴く。

『さあ、よつこアリスのお茶会へー。』

それはありすではなく『ありす』の言葉。

ありすがこの言葉を始動キーにしたのは私を思つてのことだったの
かもしれない。

「『ありす』に代わってあ私がアリスの友達になつてあげる」って
言われたような気がした。
それだけで私は救われた。

呪文を呴いたありすを中心に白い球体の膜が広がつていく。
私とテオが真っ先に包まれて少しづつ飛行船全体を包む。
飛来した魔法はそんなありすの防壁に拒まれて簡単に消える。

この魔術を発動したのを察知したのか先ほどより多くの魔法の矢が
打ち込まれる。

今の段階ではありすだけでも余裕だろう。

でもありすだけに任せたおけないとね

さあ、私も友達のために動かないとね

s i d e ありす

私が呪文を唱え終える。

「私ができるだけ近くの敵を落とす。ありすはテオをそこで守つて！」

そう言い残してアリスは戦場に身を投げる。

「あります！アリスだけで大丈夫なのか！？」
テオが心配そうに尋ねてくる。

「テオ、初めて私達と出会った時のことを覚えてる？」

「あたりまえじゃ。何で今聞いてくるのじや？」

私は少し間を空けて聞いた。

「ならあの時テオを助けたのはどっちだつたかな？」

私はアリスを信じている。

アリスが負けるはずがないと

だから笑顔で答えることができる。

「それに大丈夫だよ、アリスなら。だって私の友達なんだから」

サー・ヴァンパイア

私とテオは戦場の端っこにいる。

ヘラス帝国の第三皇女がここにいることがばれると面倒だし、今は戦場に出るのは危険だ。

兵達が争っている。

何よりアリスが暴れているからだ。

アリスを中心に多くの色の魔術が吐き出される。

アリスに挑もうとした者、私達に攻撃を仕掛けようとした者が宙を舞う。

「ホントにアリスはすごいやな。」

「そうじやな。あれだけの転移ができるじや、弱いはずがなかつたのじや」

いつものように関心するように私にテオも賛成する。

「何でアリスはいつもあれだけの魔力を抑えているのじや？」

テオの純粋な質問に一瞬ドキッとする私。

「それにあんな魔法は見たことが無いのじや。これでも魔法も勉強しておるのじやぞ？でもアリスの使っている魔法は全部見たことがないものばかりじや、何か理由があるのか？」

テオの質問に私は困っていた。

どう返したらいいのものかと

テオはアリス以外で初めて出来た友達だ。
質問には答えてあげたい。

でもこれを話してしまうと私達がこの世界の人間では無いと知られてしまう。

どうしたものかと考えたすえに私は本当のことを話すこととした。

「わかった、話すよ。でもこのことは誰にも言わないと約束できる

？」

テオは無言で頷いた。

「まず始めに私はいや、私達はこの世界の住人じゃないんだ」「この世界の住人じゃない？ありす達は旧世界の生まれなのか？」
「違う、旧世界でもない。こことは違う次元。いくつも存在する平行世界から私達はきたんだ。」

「平行世界、そんなものが存在するのか？」

「そうだ、存在する。テオは信じるかい？」

私はこの質問が少し怖かった。

テオに信じてもらえないのではないのだろうかと

でもそれは杞憂に終わったようだ。

「勿論じゃ、友達を信じないはずがないじゃろう？？」

さも当然のように返してくれた。

私は嬉しくてテオに抱きつきたいのを我慢して話を続けた。

「一つウソを付いてたことがあった。私とアリスは双子じゃないんだ。」

「そんなわけ無いのじゃ！現にお主達はそっくりなのじゃ！――

これにはさすがのテオも驚いたようだ。

疑いの目で見てきている。

「本当だよ。私とアリスは別人なんだ。」

「なら何故そこまで容姿が似ているのじゃ？」

「そうだな。昔、一人の女の子がいたんだ。

その子は生まれつき体が弱くて病院に通いつめていた。
体が弱くて運動ができなかつたその子はいつも漫画やゲームばかり

していたんだ。

当然そんなので友達が出来るわけがなくていつも一人で過ごしていく

た。

そんな時、面白そうなゲームを見つけたんだよ。

Fate/EXTRAっていうゲームでね、主人公が聖杯戦争つてゲームに参加するんだ。

聖杯戦争は予選を通過した計128人のマスターとそれに従う128騎のサーヴァントによつて行われる。

トーナメントが行われ、敗者は死に優勝者だけが聖杯を手に入れることができる。

サーヴァントとは英雄を再現拡張し実体化させてモノだ。

サーヴァントにはクラスが存在し、セイバー、ランサー、アーチャー、ライダー、アサシン、バーサーカー、そしてキャスター。

これらの中からマスターに何らかの関係があるものが召喚される。ゲームの主人公が召喚するサーヴァントはセイバー、アーチャー、キャスターから選べる。

そして私は主人公を操つてトーナメントを私にとつて大きな出来事になる第三回戦になつた。

初めて出会つた『彼女達』は禍々しい謎の巨獸を引き連れていた。それを主人公はこれを知恵を使ってなんとか倒す。

『彼女達』は聖杯戦争という殺し合いの中、幾度も無邪気な笑顔を向けて一緒に遊ぶよう催促するんだけど、これは純粹に誰かと遊びたいという年相応の願望からくるもので、自身の我慢に付き合ってくれる主人公に少なくとも本気で感謝していた。

だけど加減を知らない彼女たちは鬼ごつこと称して、有り得ない空間転移を繰り返したり、誘い込んだ主人公に魔術を使い、存在の消滅の危機に追い込んだ。

無邪気にはしゃぐ彼女らに躊躇いながらも主人公により敗れる。

「独りぼっちだつた『彼女』は、側でずっと遊んでくれた『彼女』と、誰にも見られなかつた自分を見ててくれ、遊んでくれた主人公に感謝と別れを告げて、そんな彼女の側にいたサーヴァントの『彼女』は、次回の聖杯戦争ではもう『彼女』と一緒にいられない事に涙して、砂糖菓子のように消えていったんだ。」

「これが私を大きく変えた出来事。私のように誰にも見られなかつた彼女に私はなりたかつた。

彼女になつて彼女のサーヴァントの『彼女』と一緒に遊べたらどれだけ楽しいだらうとも考えた。

彼女の名前はあります。

白いドレスを着ている幼いマスター。

そしてそのサーヴァントの名前はアリス。

黒いドレスに身を包んだキャスターのサーヴァント。

「わかつた？これがアリス。私の憧れた存在。」

「わかつたのじゃ。これは誰にも言わないのじゃ。」

「オそれだけ言つとそれ以上は何も言つてこなかつた。」

争いはヘラス帝国の勝利に終わった。

主な原因は戦場の中心にいた黒いドレスを纏った少女、アリスなのだが

「なんなのよ。この空気は」

戦場が戻つたアリスを待つていたのは戦場とは違う重さの空気だつた。

早々に咳くアリス。

「つてわけでアリスのこと話したんだ。」

ありすが帰つてきたアリスに気がつきテオから見えない位置に移動してアリスが居ない間のことをありすが説明した。

説明を聞くうちに理解したようで表情に真剣みが増していく。

「テオは私のこと何か言ってたの？」

「何も、このことは誰にも言わないからつて言つてたくらい」

「なんの話をしておるのじや？」

突然、後ろから声が聞こえた。

振り向くといつもとテオの姿があつた。

「どうしたんじや、こんな部屋の端で固まつて」

驚いている私達を他所に話しかけてくるテオ。

「アリスの秘密を勝手に聞いてしまつて悪かったのじや。こんな妾

を嫌わないでくれ。」

アリスは自分が勘違いをしていたことに気がついた。テオは私のことを嫌いになつたからあんな空気になつていたのだ。

だがどうだ。

実際はテオも私と同じ勘違いをしていたではないか。おかしなこともあつたものだ。

「なーんだ、私はてっきりテオに嫌われたんじゃないかと思つていたのに」

「なんで妾がアリスを嫌わないといけないのじや！」

「だつて友達なのに秘密にしてたから・・・」

「友達にだつて隠し事の一つや二つあつて当然じや。」

「ありがと。」

頬を赤く染める一人。

友達が居なかつた者同士のせいか勘違いがあつた。

これも友達がいなければ経験できないことである。

テオはその身分のために、アリスはその生まれのために友達と呼べるもののが存しなかつた。

その様子を嬉しそうに眺めるあります。

またありますも友達がいなかつた。

アリスに自分を重ねているのだ。

「復活だーー！」

病院の前の広場にナギの大きな声が響き渡る。

side 紅き翼

前回の戦いで黒いドレスを身にまとった少女につけられた傷がやつと治つたのだ。

長い間病院に拘束されていたナギ。

「おや、また元気がいいですねナギ。 そんなにあの少女にリベンジしたかったのですか？」

困つたものですね、と言いながら笑つてゐるアル。

「あつたりまえだ！ 最強の魔法使いの俺が負けるはずがねえ！！ 前回は気を抜いてただけだ」

「ホントにそうだと嬉しいんですがね～。それにナギがいない間にあつた争いでは彼女がヘラス帝国側に付いてこひら《連合》が負けてしまつたようですし。」

「それなら俺がアイツの相手を引き受けたてやるよ。それで五分五分だ。」

「頼みましたよナギ。彼女が次の争いに出でたら任せます。」

「わかつたぜ。」

高らかにしたナギの宣告。

そんないつもの光景これが見られる田が紅き翼にはどれ程残つているのか。

この歴史を知つているものは誰も存在しない。

side ヘラス帝国

これより聖地『オステイア』回復作戦を実行する。

この作戦は最重要だ。

戦線の中心に第三皇女テオドラ・バシレイア・ヘラス・デ・ヴェスペリスジニアの護衛であるアリスを立たせる。

そこに敵が目を奪われている隙に攻め込むのだ。
この意見に異議のあるものはいるか？

はい。私のその意見に反対です。今回の作戦ではアリスは出でずに
それに匹敵する者を私が呼びましょう。私に任せてもうえれば必ず
や期待に応えてみせましょう。

そなたは信用しておる。なら任せるとよいな？

はい。この程度、アリスに任せる必要は「」ません。必ずや成功
させてみせましょ。

ヘラスの城内の王座で行われる会議。

そこに参加するのは大物の政治家や名立たる英雄たち。

そこでただ一人異彩を放つ存在。

10歳くらいの容姿に白いドレスを纏った西洋の人形のように綺麗
な少女。

発言で決定事項であつた作戦を覆してしまはるほどの信頼を受ける少
女ありすは今回の作戦で自分だけの力でどれだけの召喚ができるの
か試す機会を得た。

テオが戦場に出るというサプライズもあつたが元々この戦争に参加
しているのは世界のためではない。
自身のスキルアップのためである

今回はどれだけ私は一人で戦えるのかを知りたかったのだ。
つまりさつきの発言はほぼ嘘である。

しかし、今まで多くの成果を上げてきたアリスの片割れだつたため

に今回は意見が通った。

オステイア回復作戦は原作に大きく関わってくる出来事。できればアリスを介入させてストーリーを壊したくなかったことも入る。

私の『友達』はどれだけのことができるのか期待がつのるひと時だ。

side 紅き翼

「くつ」

「遅かつたか」

俺達がオステイアに着いた時、そこはもう数百の戦艦が飛び交う戦場へと変わっていた。

「ちッ・・ 気にいらねえぜ」

上空からはヘラス帝国の巨大な戦艦が白い人型の鬼神兵を投入している。

それに続くように魔法の雨の嵐。

地上からは鬼神兵が

上空からは魔法使いと戦艦が迫っている。

「精霊砲全弾消滅！」

「消滅！？ 王宮の魔法障壁ではないのか！？ まさか・・・！？」

「広域魔力減衰現象を確認！ 減衰速度加速中・・・ 間違いましたん！！」

「黄昏の姫御子です！…」

戦艦と鬼神兵から放たれる精靈砲。

しかし、それを消し去る完全魔法無効化能力。

「黄昏の姫御子・・・何だつてそんなもん!-?」

「歴史と伝統だけが売りの小国に他に手はないでしょ。」

平然と言いのけるアル。

「だが王族だろ!-?」

「まだ小さな女の子だつて聞くぜ」

「冷静になれナギ。 やかましいぞ」

「俺は常に冷静だつづーの」

興奮気味のナギを抑える詠春。

「戦争ですからね

・・・向こうの真の目的もおそらく

それに少女の年齢も私同様見ためどうつとは・・・

「くそつ」

「防衛結界・・・」

「うわあッ」

前方では黄昏の姫御子がいるであろう建物が今まさに襲われそうになっていた。

ナギの敵との間に入り雷の暴風を放つ。
それだけでヘラスの鬼神兵は崩れ落ちてしまった。

「そんなガキまでかつぎ出す」たねえ

「後は俺に任せときな」

「お・・お前は・・・紅き翼・・・千の呪文の・・・」

「そう！・・・ナギ・スプリングファイールド！・・・
またの名をサウザンドマスター！・・・」

ノリノリで自分の名前と二つ名を言い放つナギ。

横では詠春が自称の一いつ名を言い放つナギに突っ込みを入れていた。

「えーと・・・百重千重と重なりて走れよ稻妻
行くぜ オラアツ！・・・」
『千の雷！・・・』

ナギに続くようにアル、詠春も敵をなぎ払つていく。
その様子はまさに英雄。

「安心しな

俺達が全て終わらせてやる。」

「な・・・しかし・・・」

「敵の数を見たか！？ お前達に何が・・・

俺を誰だと思つてる ジジイ」

「俺は、最強の魔法使いだ」

「あんちゅこ見ながら呪文唱えてるあなたが言つても今ひとつ説得力がありませんね」

ナギへの信頼からそれでもナギの言葉を信じている様子で笑うアル。

「それに・・・あなたの力がいかに強大であろうと世界を変えることなど到底・・・」

「るせーっ つってんだろアル。」

俺は俺のやりたいよーにやつてるだけだ、バーク
ナギは照れたように言い放つ。

そこでナギはようやく気がついたよしひの塔の中心に繋がれてい
る少女に歩み寄る。

「よしぃ、嬢ちゃん。名前は？」

「ナ・・・マエ・・・・？」

少女はその虚ろな瞳で考える。

「アスナ・・・・

アスナ・ウエスペリーナ・テオタナシア・エンテオフュシア

「なげーなオイ、けど・・・アスナか、いい名前だ」

紡ぎだされたその名前に応える。

「よし、アスナ待つてな」

そう言つてマントを翻す。

アルと詠春に発破をかけ、外へ向かう。

アスナはその背中を見送った。

激化するオスティアでの戦争。

強力な魔法力を有するヘラス帝国の侵攻力は圧倒的だった。
しかし、そこにそれを拒むものが現れた。
紅き翼だ。

これを排除するためにヘラス帝国は最終兵器とも言える存在を送り
こんだ。

白いドレスに白い髪の少女。

少女の名前はあります。

今ここに彼女の見たことも無い魔陣による召喚が行われる。
魔方陣から溢れる魔力に大気が軋む。
紫電をあげてうなる。

やがて周囲は眩い光に包まれた。

光が収まった時、そこに現れたのは悪魔だった。

実際には悪魔では無いのだろうがそう呼ぶに相応しい怪物。

架空の巨人『ジャバウオック』

ありすの『お友達』

side 紅き翼

「行くぜ！ オラッ！」

ナギがあんちよこで呪文を唱え打つ。

それだけでヘラス帝国の鬼神兵が一体また一体と崩れ行く。しかし、ナギが次の相手にかかるうとした時それは現れた。

「…………！」

ケモノの咆哮の様な声が戦場に鳴り響いた。

前に一度だけ対したことのある・・・

「アル！！ こいつは！」

「ええ、あの戦場で見た怪物で間違いないでしょ。 こんな禍々しい魔力は他に見たことがありません。」

アルが応える。

「そうだな、だが前回と様子が違う。 魔力が前より圧倒的に少ない。 これなら私達だけでも倒せるはずだ。」

確かに詠春の言う通りであった。

前回見たときに比べて魔力の量が減っている。
前回はナギの魔力総量の三倍以上あった。

しかし、今回はナギと同等かそれ以下なのだ。

相手が弱体化していることに気が付いたナギ達は怪物『ジャバウオック』を見据える。

どうやら相手もこちらに気がついたようだ。

森の木々をなぎ倒しながら一直線にこちらに向かっている。

先に動いたのはナギだった。

上空からジャバウオックがいるであろう場所に狙いをつけて雷の暴風をぶつ放す。

『ドドオオン・・・』

響く雷。

呪文があたつた場所からは木々を消し飛ばしながら土煙が上がる。

煙が晴れた。

ジャバウォックはさすがに無傷とはいかなかつたのか所々に傷がで
きている。

そして咆哮。

同時にジャバウォックの体が赤く光を放ち、その体を魔力が駆け巡
る。

ジャバウォックの力が強化されしていくのが田で見てわかる。
跳躍。

それだけでナギの目の前まで接近。

ジャバウォックは右腕を振りかぶりナギに向かつて振り下ろす。

突然のことにはナギは避けることができず簡易の障壁を張る。

しかし、ナギの障壁は紙のように裂ける。

それに気がついたナギは咄嗟に右手で軌道をずらす。

結果、ジャバウォックの右腕はナギの左の脇の下を通り空振りに終
わった。

ジャバウォックはそのまま体当たりのように体をぶつける。
ナギは吹き飛ばされるがそれをアルと詠春が受け止める。

赤い翼で飛翔するその姿はまるで伝承をそのまま引きずり出してき
たような悪魔。

口を大きく開いて炎の塊をナギに放つ。

『雷光剣！』

詠春の技が炎を切り裂いてジャバウォックに迫る。
ジャバウォックは障壁で防いで威力を軽減させる。

置み掛けるようにアルのお得意の重力魔法で動きを拘束する。

ナギは呪文詠唱に入り、詠春は気を溜める。

そして開放。

『千の雷！』

『雷光剣！』

ジャバウォックが光の奔流に巻き込まれる。

ジャバウォックは足の先から粒子になつて消えていった。

「なんとかなったな」

「ええ、しかし厄介なことになりました。」

「どうしたんだ？」

アルの発言にナギと詠春は首を傾げる。

「先ほどの赤い怪物は光のように消えていきました。つまり実体が無かつたのです。」

「おい、それはどーゆうことなんだ！？　俺は確かに呪文を当てる感触があつたぞ」

「それは当然です。あれはシキガミや使い魔の類のものです。だからこそ厄介なのです。」

つまりはアレだけの物を作成することができる術者が存在するということなのですから」「

アルの言つ通りだ。

アレだけの怪物を作成できるのであれば相当の実力者と見て間違いない。

そしてこれだけの使い魔を作成できる者がヘラスにいることがわかつてしまつ。

「ですが今回も一体しかここにいないことから作成に時間が掛かる。

または一度に一体しか制御できないことがわかります。これからも今回のレベルの相手なら大丈夫なはずです。

「それなら安心だ。これならナギだけでも対処できる相手だからな」

「これからもアイツが出てきたら俺が相手すればいいんだろう？ なら喜んで引き受けるぜ！！」

「それでいいですよ、ナギ。

その隙に私がなんとか術者の特定をしましょう。おそらく見つけることはできないでしょうがやらないよりはマシです。」

それからオステイアの戦いでは紅き翼の活躍によりヘラス帝国のオステイア回復作戦は失敗に終わった。

ヘラスのオステイア回復作戦の失敗の主因である紅き翼には討伐隊などが送りこまれたがナギ達はこれを悉く返り討ちにする。ヘラスは傭兵としてラカンを送り込むが何度も戦っている間に仲間になる。

この時、誰もジャバウォックが初めていた場所がどうなっていたのかを気にしていなかつた。

気にする時間もなかつたのかもしれない。

重要な作戦で失敗したヘラス帝国は大規模転移魔法の実戦投入によつて連合の喉元

全長三百キロに亘つて屹立する巨大要塞「グレート＝ブリッジ」をついに崩壊せしめる。

そして時はグレート＝ブリッジ奪還作戦

『千の雷！』

『雷光剣！』

『斬艦剣！』

『えいえんのひょうが！』

紅き翼のメンバーの技が鬼神兵に襲い掛かる。

眩い閃光。

それに続く爆弾のような轟音。

「お、お前達は連邦の！…」

「その通り！俺はナギ・スプリングフィールド！またの名をサウザンドマスターだ！…」

そのあとも紅き翼の攻撃は続き防戦一方のヘラス帝国は一方的に負けてしまった。

ありす達が出てくる」ともなく。

一方、ありすとアリスはテオを守ることに掛けりきりであった。ありすが活躍してからとくものテオを襲うものが続出したのだ。原因はありすが負けてしまったこと

つまり、俺でも勝てるんじゃないんだろうか？といつ考えをするものがあらわれた。

相手がたとえナギ達であつたとしても負けたことにはかわりない。今までアリスが戦場で負け無しだった。
しかし、負けてしまった。

襲撃者達は実際にはそこまで強くないのではないのだろうか？と考えた。

引っ越し無しに襲い掛かってくる襲撃者のためにアリス達はテオの傍を離れることができなかつた。

アリス達がテオを守つてゐる間に世界は大きく動いた。
戦況は一気に大逆転。

連合は勇躍。

敵軍を攻め戻し帝国領内へ躍進する。

紅き翼には新たな仲間としてガトウとタカミチに入る。

そして

「俺の故郷がある旧世界じゃ超強力な科学爆弾が発明されててこんな大戦はもうおこらねえそうだ。

戦を始めたが最後みんなまとめて滅んじまうからだつてよ。だが、こっちの戦はいつ終わる?

帝都へラスまで攻め滅ぼすつてか?

やる気になりやこの世界だつて旧世界の科学爆弾以上の大魔法はある。

そんなこと続けてどうなる?

意味ねえゼツ！..」

「まるで・・・」

「まるで

誰かがこの世界を滅ぼそつとしているようですか？」

「ある意味そのとおりかも知れないぞ。」

「ガトウ」

「俺とタカミチ少年探偵団の成果が出たぜ。
やはり奴らは帝国・連合双方の中核にまで入り込んでいる。」

「秘密結社『完全なる世界』だ」

日が傾き空が夕日に染まる頃、

連合の本国首都まで呼び出されていた。

「なんだよガトウ、わざわざ本国首都まで呼び出してん」「あつてほしい人がいる。協力者だ」

「協力者？」

「そうだ」

「マクギル元老院議員！」

「いや、わしちやう。

主賓はあちらのお方だ」

「ウェスペルタティア王国・・・

アリカ王女」

「ワハハハハ

上手いことやりやがってこんガキヤ！

「ああ！？」

「何の話だ！？」

「とほけんじやねーよ

お姫様とイチャイチャキヤイキヤイ おしゃべりしてたるーがツ！」

「してねつつ何がイチャイチャだ バカ」

「なーに言ってんだよ俺なんか・・・

『気安く話しかけるな下衆が』

だぜー？

・・・いや ありやイイ女だぜ

一本芯の通つたな

「頭大丈夫かジャック？マゾかアントア？」

俺あ あんなおつかねえ女見たコトねえぞ

「グハハハハハ

そーゆートコはまだまだカワイイガキなんだよな。てめーはよ。

「んっだ そりや。

意味わからんねえ触んなつづーの
勝負すつか てめ

「しかしよ、ウェスペルタティアの王女つひととはアレか？」

例の姫子ちゃんの姉君つことかよ？」

「いや・・・

姫子ちゃんのことば・・・なんか話いくいみたいだつた。」

「へえー？」

「アリカ姫・・・か」

続く戦い。

あまりにも長いその戦にテオドラは違和感を覚えた。

一度灯つた違和感の灯火はなかなか消えなかつた。

そこで考えたテオは危険だが先に進める一手を打つた。

一步間違えると自分の身が危険に晒される一手。

それは連合の姫、アリカ・アナルキア・エンテオフェシアに協力を申し込むことだ。

そして今。

テオはアリカと同室で会議を行つてゐる。

ここはメセブリーナ連合の本国首都。

ここには秘密裏にアリス達とやつてきた。

他の護衛を付けなかつた理由。

それは調べていく内に帝国の上層部ですら黒い可能性が出てきたからである。

なので今現在テオを守つてゐるのは部屋の前で辺りを警戒しているアリス達だけ。

「それで妾はそなたに協力を頼みたいのじゃ」

「こちらこそ主に協力を申し込みたかったところじゃ。ところで主の護衛は彼女達だけで大丈夫なのか？」

「大丈夫なのじゃ、それに妾はアリス達以上に強い『魔法使い』を見たことがないのじゃ」

「ほお、主がそこまで言つ者達か。じゃが私も最強の魔法使いには心当たりがある」

「そうか、妾も会つてみたいものじゃ。」

テオがアリカの発言に興味を持ったその直後。

二人の部屋の床中に魔法陣が張られた。

それは部屋全体を覆うほどの光を出した。

そしてその光が無くなつた部屋には既に一人の姿はなかつた。

「テオっ！！」

いきなり現れた魔法にアリスが気がつき、部屋のドアを開けて入つた時にはもうその部屋はもぬけのからだつた。

「私がちゃんと気をつけていれば！」

「わかつていたはずなのに止めることができなかつた私のせいなんだよ！」

「ありす・・・そうね。それにここでモタモタしてるだけじゃ前に進めない。

早くテオを助けないと」

ここにいても進めない、故に行動を起こす。

ありすの決意は止まることを許さないのだから。

「アリスは私をテオがいる夜の迷宮に送つてくれればいい。
その後は靈体化してついてきて。

ありすが一人いることはあいつ等に知られると厄介だ。」

ありすのいつもと変わらぬはずの顔から真剣な気配をアリスは感じたのだろうか、何も言わずにありすの手を取る。

友が待つているのだからアリスに止まることは許されない。
己が望みのために

空には満天の星空。

窓から覗く満月が淡く一人の少女を照らす。
手を繋ぐ二人は友のために

部屋の鏡が少女を映す中、光と共に姿を消した。
後には満月を映す鏡だけが自己を主張する。

どれほどユメに見ただろうか。

囚われの妻を助けに来る騎士の姿を
政治などと言う牢獄の扉を開けて連れ出してくれる一人の少女の姿を
こうして自由を手に入れた。
友を手に入れた。

感謝してもしきれない。
だから妻は自身の全てを捧げよつ。
この身も
この魂さえも

ありす『アリス』は妻の騎士。
何が起きてても妻を守つてくれる。
断じて比喩ではない。

そうでなければウソだ。

ありす『アリス』が誓つてくれた。
妻を守ると。

例えそれが一人にとつては遊び程度のものでも
友が誓つてくれたのだ。

だから妻はどんな時でも臆することはない。
ありす『アリス』が助けに来てくれるのだから。

声が聞こえる。

思考が戻つてくる。

「・・・オ、・・・テオ！」

モノに色が戻る。

いつしょに攫われたアリカが妾に話かけているようだ。
返事をしなければ、

「どうしたのじゃ、アリカ？」

妾の返事に驚いたようにその表情が分かりにくい顔が崩れる。

「どうしたじやないだろう！私が何度も話しかけても返事がなかつたではないか！」

奴等に何かされたのかと思つたほどじや。「

「大丈夫なのじや。何もされてないのじや、ちょっとと考え事をしていただけなのじや。」

どうやら長く思考しそぎていたようだ。
気をつけないならないな。

「こんな状況でよく考え方なぞできるものじやな」

「そういうアリカこそ余裕そうではないか。」

そんな妾も他人が見れば余裕な表情をしているのだろう。

「私にはやらなければならないことがある。それに必ずヤツが来てくれると信じておるからな」

そつ妾に話すアリカの顔は心なしか微笑んでいた。

「テオ、お前はどうなのじや？お前も余裕そうじやう。」これが敵

の基地と分かっているのか?」「

「当然じゃ、ただ約束があるのじゃ。」

「約束?」「

応えに時間は要らない。

妾にとつて当然と言える答えなのだから。

「妾の騎士は妾に誓つてくれたのじゃ。私を守ると

「それだけ・・・か?」

またも驚いた様子で私を覗きこむ。

「それだけじゃ。一人を妾は信じておる、だから安心して待つてい
られるのじゃ。」

建物の外か爆音が聞こえてくる。

近づいてくるその音にアリカは眉を顰め、テオは音のする方向の笑
顔を向ける。

次の爆音と供に白いドレスが覗きこむ。

そして・・・

「テオ!!--助けに来た!」

私の信じた姿が現れた。

転移で夜の迷宮の前に現れた私達。

アリスはすぐさま探索魔術でテオの位置を把握するとそこに一直線
に行けるように魔術を打つ。

アリスの手のひらから出た炎が直線に飛ぶ。
壁にあたるとそこは爆音と供に崩れ落ちる。
それを確認すると続けざまに炎を打ち込む。

そしてテオが無事なことを確認すると音もなく姿を消した。

テオから見れば私だけが助けに来たように見えたはずだ。
そこから私はテオに声をかける。

「テオ！－助けに来た！」

何故かテオは笑顔で私に飛びついてきた。

「ありす遅いのじゃ、妾は待ちつかれたのじゃ。
アリスはどうしたのじゃ、いつしょではないのか？」
驚いているアリカ王女を無視して話かけてくるテオ。

「アリスはちゃんとここにいるよ。

連合に私とアリスが「こゝ」がばれると少し面倒なことになるから
靈体化してゐるんだ」

テオの耳に口を近づけて囁くように告げる。

「そ、そういうえばアリスはサー・ヴァントだつたな、」

テオは顔を赤く染めながら私から離れた。
(「この頃はよく照れたように私から離れることがあるけどなんでだ
る？」)

靈体化しているアリスは拗ねてしまった。

私が首を傾げていると私達のやり取りを見ていたアリカ王女が微笑
ましそうにこちらを見ていた。

私はその様子を無視してアリカ王女に話しかけた。

「はじめまして、私はテオドラ第三皇女の護衛をやらせていただい
てあるあります、と言つものです。
アリカ様、ここからは脱出したほうがいい。どうこますか？」

すぐさま真剣な表情になるアリカ王女。

「ほうお、お前がありすか、

気遣いはありがたいが私はここに残る。待っているヤツ等がいるのでな」

そう話している間にヤツ等がきたようだ。

「よう、姫さん。」

「遅いぞ。我が騎士。」

紅き翼が。

「おい姫さん、誰だそいつは」

しばらくして私達に気が付いたようにアリカ王女に聞くナギ。

「この人はヘラス帝国の第三皇女テオドラじゃ。私と交渉中に敵と一緒に捕縛されたのじゃ」

「テオでよいぞ！そしてこっちが妾の護衛のありますじゃ」

テオに紹介されたのでとりあえず自己紹介。

「紹介に立つたあります、といいます。ナギさんとは久しぶりになりますね？」

久しぶりと言つたのに驚いたのか固まつて居るナギ、そしてそれを興味深そうに見る詠春。

「ナギ、知り合いか？」

「いや、覚えて・・・ああ！！」

詠春！こいつは俺に氷の魔法で攻撃してきたやつだ！――

「なんだと！」

ナギは思い出したようで杖を構える。

詠春もさすがに驚いてこちらに刀を構えている。

「思い出しても貢えましたか、あの時の怪我は治りましたか？治っていないのなら私が治しますが」

私は皮肉を込めてナギに語りかける。

「てめえ！！」

これに切れたのかナギが突っ込んできた。
それを防ごうと呪文を唱えた。

しかし、

『一人ともやめるのじゃーー。』

テオとアリカの声が響き渡った。

それに私も呪文を破棄し、ナギも杖を下ろした。

「何があつたのかは知らないが一人ともやめるのじゃ、これからは協力関係になるのじゃ。仲間同士で争つても意味が無いじゃね？」

「そりや、じうむう！」とだ！姫さん

「そのままの意味じやこれからはこの者達も仲間じや。これは決定事項じや。」

「姫さんがそうこうならしかたねえな」

話がついたのかこちらに向かつてくるナギ。

「さつきはすまなかつたな。てつきり敵かと思つてよ。」
案外普通にナギが謝つてきた。

「いらっしゃりもすまなかつた、これからはよろしくね。」

「おう！でも前見た時はもう一人いなかつたか？
う、痛いとこを突いてくる。

「あれは分身なんだよ。」

「そうか、確かにお前そつくりだつたしな」

我ながらむちゅくちゅな応え。

でもそれで納得したのかナギはアリカ王女の横に戻っていく。

「アリカ、妾達も紅き翼と行動を供にしてもよいのか？」

「もちろんじや、お前達がいれば心強いからな」

「つして私達は紅き翼と行動を供にすることになった。

隣ではテオがやつきの件について説明しようと小突いてくる。

テオに短く説明して紅き翼についていきますか、

「何だ、これが噂の『紅き翼』の秘密基地か！
どんな所かと思えば掘立小屋ではないか！」

「俺ら逃亡者に何期待してんだ
このジヤリはよ」

「なんだ貴様、無礼であるつー。」

「へつへん

生憎ヘラスの貴族にや

貸しはあつても借りはないんでね」

「何い？ 貴様何者だ」

ついて早々ケンカを始めるテオとラカン。

仲が良いのは結構なのが場所と時間を考えて欲しいものだ。
そういうば原作でも肩車するほどの仲だつたはず。
でもこちらではそこまでではないようだ。
やはり私達と言う友達がいるからだろうか？

紅き翼のアルや詠春も呆れた様子で見守っている。

紅き翼の連中はさすがにテオことヘラス第三皇女テオドラは知つて
いるようだし
私も自己紹介をしなければ。

私はアルと詠春がかたまつて いる所に向かう。
あちらもこっちには気がついていたようでこち
らに顔を向けてくれた。

「はじめまして。私はテオドラ様の護衛をさせてもらつて いるあり
すといいます。

今後ともよろしくおねがいします。」

ペコリとお辞儀をして前に向き直るとアルは何かに勘付いたよ
うな顔。

「まさか、貴女はあのナギに勝つたと聞くありますかんでしょうか？」

「ナギに勝つた人物が他にいないのであればそれで間違いないでし
ょ。私は一度ナギに勝つっていますから」

「やはり・・・。では黒いドレスの少女と言つるのは貴女のお仲間で
しょうか？」

「ナギに聞いたのでしたらそれは違います。ナギにも言いましたが
アレは私の分身といいますか使い魔です。（ウソは言つてないウソ
は）」

「それはそれは。それほど強力な使い魔を作れる方だと思います
でした、殆ど魔力を感じないと言つのに・・・」

アルが警戒の目で見てくる。

それはそうだろ。

強い使い魔が作れるということはそれだけ強い魔力があるということだとだ。

なのに私から一般人並にしか魔力を感じることができない。

何故なら常に魔力を遮断する障壁を私とアリスの周りに展開しているからだ。

もちろん、私には魔術の知識は殆んどないのでこれはアリスによるものだ。

しかしそんなことがアルには分かるはずもなく疑うことなく私を強者だと思うはずだ。

「そんなに警戒しなくても大丈夫ですよ。私はテオ様を守る者ですからテオ様に危害が及ばない限り貴方達とは敵対関係になるつもりはありませんので」

こちらの言葉を信用していいと思つたのか先ほどまでの殺氣が発散していた。

「すいません、疑つてしましました。これからはよろしくお願ひします。」

「分かつていただければ大丈夫です。こちらこそよろしくお願ひしますね。」

ホントはその読みは間違つていらないんですけどね。

警戒を解いたと思われるアル達から田を離しナギ達が話ている所に顔を向ける。

そこでは現状の確認を行つてゐる最中だつたようだ。

「連合に帝国・・・そして我がオステイア。
世界全てが我らの敵といつ訳じやな
じやが・・・主と主の『紅き翼』は無敵なのじやろ?」

以外な姫からの質問に私は呆れた。

だがナギにとつては悪くなかったよう驚くと同時に嬉しそうに見える。

「世界全てが敵。
良いではないか。

こちらの兵はたつたの8人。

だが最強の8人じや。

ならば我等が世界を救おつ。

我が騎士ナギよ、我が盾となり、剣となれ。」

「・・・へ、だから俺は魔法使いだつつーのに・・。
やれやれ、相変わらずおつかねえ姫さんだぜ。

いいぜ、俺の杖と翼、あんたに預けよつ。」

・・・あれ?

8人つて私も入つてるの?

それから私たち『紅き翼』は頭脳労働担当と肉体労働担当に分かれ

た。

頭脳派は主にアリカ、テオ、アルを主戦力に『完全なる世界』の情報収集。

幸い、姫達のおかげで味方も徐々に増えた。

肉体派は残りの戦力で敵と判断されたものを排除していく。

私は頭脳派に所属してテオの護衛をした。

そしてラカンがいつには映画なら三部作、単行本なら十四冊分くらいは行くであろう六ヶ月の死闘の後、遂に奴らの本拠地を突き止め追い詰めた。

『墓守りの宮殿』周辺

「不気味なくらい静かだな、奴ら」

「なめてんだろ、悪の組織なんてそんなもんだ」

いつもの服装で腕を組み、敵の拠点『墓守りの宮殿』を今までに見たことがないくらい真剣な目で睨みつけるナギ。

その言葉に同調するよつに軽く返すラカン。

今、私はナギ達と同じようにこの場に立っている。

非常に不本意ながら私はテオに頼まれて紅き翼の手助けをすることになった。

ホントはテオを傍で守りたかったのだがテオに頼まれてしまつては

協力しないワケにはいかない。

なので今回はアリスがテオを守っている。

アリスではなく私が戦場に出ることになったのはアリスからの試験である。

これまでテオの護衛をしながらも魔術の学習をしていた私はいつもアリスが使っている魔術の大半は習得することに成功した。アリスが言つにはよほどことが無い限り負けることはありえないそうだ。

「ナギ殿！

帝国・連合・アリアドネー混成部隊、準備完了しました。」

「おひ

ナギのもとによつて来たのはアリアドネー総長のセラス。返事を返すナギ。

「あんたらが外の自動人形や召喚魔を抑えてくれりや俺達は本丸に突入できる。
頼んだぜ。」

「ハツ、それで、あの・・・ナギ殿

「ん？」

「ササ、サインをお願いできないでしょ？」「

「ああ？ああ、いいぜ、それくらう。」

「そ、尊敬していました。」

頬を真っ赤に染めながらセラスは紙とペンを取り出しぱに差し出した。

ナギは拍子抜けしながらもそれを受け取り慣れた手付きでサインをする。

セラスは歓喜したようすで本音をいいます。

まったくここが戦場だつてことを忘れてしまっているのではないかと疑つてしまいそうになる光景だ。

「ナギ殿、先ほどから氣になっていたのですが、その可愛い少女は一体何者なんでしょうか？」

「ああ、こいつは帝国の姫さんの護衛だ。
こんな容姿だが実力は保障するぜ、なんたつて俺を倒したことがあるからな。」

「なー? ナギ殿ですか」

「今度やつたら俺が勝つだろ! けじな」

酷い言われようだ。

だが言つてることは殆ど間違つてないので反応はできないんだけど。

「まったくこんな容姿で悪かったですね。

始めまして、テオドラ第三皇女様の護衛を勤めさせていただいておりますあります、と申します。

実力には余り自信はありませんがよろしくお願ひします。」

「い、いえ。ナギ殿が信頼していらっしゃる方になら安心して任せ

る」ことができます。」

なんだか余り私は信用されてないようだけど『気にしないこと』といつもう。

「連合の正規軍の説得は間に合わん、帝国のタカミチ君と皇女も同じだらう。

決戦を遅らせることはできないのか？」

「無理ですね、私達でやるしかないでしょ。」

「既にタイムリミットだ。」

「ええ、彼らはもう始めています・・・」

『世界を無に帰す儀式』を。

世界の鍵『黄昏の姫御子』は今、彼等の手にあるのです。」

連合を説得中のガトウからの通信が入る。

『どうやらタイムリミットには間に合わなかつたようだ。』

もう戦いは始まるようだから私の力を少しでも知つてしまひたいことしよう。

「ナギ、初めの攻撃は私にさせてもられないか？」ここで私の力を知つともらいたい。」

「ああ、いいぜ。俺も興味あるしな。」

よし、ナギに了解は取つた。

初めての広範囲殲滅呪文だけど大丈夫なはずだ。
まずは魔力隠蔽を解かないとな。

小さく隠蔽魔術解除スペルを呴く。

『ほづ』

それは誰の呴きだつたか・・・
開放された魔力はナギを上回る量。

そして魔力の色は彼女のドレスの色とは正反対の黒。
それは見るだけで死を連想させる負の念を宿した暗黒だった。

いつの間にが始まつていた詠唱。

聞き取れないほど高速で行われる聞いたことも無い詠唱。
そして出来上がつていいくのはこの世界の魔法とは全く異なつた異質
な魔法陣。

理解できない詠唱と理解できない魔法陣が起こす現象。
それはありすの魔力を吸いそれと同じ色に発光する。

そこに居た者全ての思考を集中させたそれが今、ありすの最後の言
葉と共に解き放たれる。

『涙のプール』

言葉と共に魔法陣からは大量の水が噴出した。

その勢いは敵を巻き込みながら墓守りの宮殿の周囲を多い尽くす。

そして水は完全に宮殿を多い尽くす球体となつて固定されて消滅し
た。

しかしそれでは敵を少し削つただけに止まつた。

混成部隊の多くがこれだけなのか、と肩を落とし始めた時それは起きた。

宮殿周辺にいた召喚魔が次々と消滅し始めたのだ。

それはまるでシャボン玉が弾けるかのようだった。

最終的には水の球体に飲み込まれた範囲にいた全ての召喚魔を消し

去るまで続いた。

九話（後書き）

誤字、脱字がある場合は感想に書き込んでいただけると嬉しいです。
感想をいただけると作者のやる気に繋がります。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3937u/>

白と黒の魔術師

2011年8月27日05時25分発行